

パンのある幸せな食卓を

プロのパン屋への道(15)

倉庫に行ったら、使えるフランス語単語がいきなり2000個増えた！

文 木村安兵衛

text by Yasube Kimura

ア

メリカ時代もそうでしたが、フランスパリでも御多分に漏れず言葉で苦勞する事となります。数字をとってみても日本語が10進法を採用しているのに対して、英語では12までが独特の言い回しをしてその後は10進法に戻ります。フランス語に至っては16まで独特な数字があり、その後70は60と10、80は20が4つ、90は20が4つと10という数え方をします。高校生の頃に初等中等教育において日本のほうが数学の成績が欧米よりも良いという様な内容の文章を読んだ記憶があります。これがその原因かと納得してしまいます。もしくはひよっとするとインド人よりも数学が得意なのではないかなどと今想像しています。

ただ、幸いな事にパンにおける専門用語は英語とフランス語ではかぶっている物が多かったので仕事は想像していたものよりもスムーズに入る事が出来ました。しかし日常生活におけるフランス語は全くできずに常にフラストレーションを感じておりました。

ある日仕事をしながら発酵は英語でファーメンテーション、フランス語ではフェルマンテーション。生地の切り分けをする事を英語ではディバイド、フランス語ではデビデ。似ている言葉が

多いな。日本人は言葉のハンディキャップが大きいな等と考えておりました。しかしどうしても納得できない程かけ離れた単語が砂糖だったのです。シュガーに対してフランス語ではシユクル。この違和感が頭を離れる事ができず、ずっとモヤモヤした気分になっておりました。

ある日砂糖を取りに倉庫に入り、1袋30kgの砂糖袋を肩にのせた時、ドスンという衝撃とともに頭の中がスパークしたのでした。英語で砂糖はシュクロースという呼び方だった事に気づいたので。そうかフランス語も英語もラテン語の末裔だったのだ！という小学生でも分かりそうなことを今更ながら発見したのであります。そういえば駅はステーション、フランス語ではスタシオン。情熱、パッションはパシオン。似ている。つまり英語の中の語源がラテン語の単語はそのままフランス語っぽく発音すれば日常会話で活用する事ができるのです。特に分かりやすい例では、語尾がtionやssi

onで終わる名詞は動詞にしてもフランス語っぽく発音すれば何とかなる！ということなのです。そして男性名詞le、女性名詞laは二分の一の確率

だから諦める、もしくは適当に付けるという結論に至る事になりました。まあ間違えれば直してくれるフランス人氣質が理解でき始めたのかも知れません。

この瞬間にフランス語で使える単語が2000程増えたのです。試しに英語からの転用でフランス語を創作してみると結構通じるのです。倉庫に砂糖を取りに行つて戻ってきたら、私が急にフランス語をしゃべりだしたので皆が驚いたのは言うまでもありませんでした。

Profile

1969年生まれ。慶應義塾大学法学部卒業後、千代田生命保険相互会社に入社。その後アメリカで唯一のFDA(米国食品医薬品局)研究機関である米国立製パン研究所へ留学、ベーキングサイエンスを研究する。ニューヨーク、フランスにて修業を積んだ後、その腕前と経営センスを見込まれ、エリック・カイザーの在日パートナーとして、2000年に株式会社ブランジェリーエリックカイザージャパンを設立。2001年メゾンカイザー1号店として東京・高輪に店舗をオープンし、2017年現在29店舗を数える。

